

「若者が主役!地域まるごと活性化事業」
むかし倉敷ふれあい祭り
むかし倉敷ふれあい祭り実行委員会 美作市中央公民館

＜説明＞

むかし倉敷ふれあい祭りとは、岡山県立林野高等学校による地域教育活動の一環で、平成 23 年から生徒、学校担当者、町内会長らで実行委員会を構成し林野商店街が舞台の地域一体型の祭りです。

林野高等学校では、2 点の地域教育活動に取り組んでいます。

1 点目が、「総合的な学習の時間」（マイ・ドリームプロジェクト：「MDP」）です。これは、生徒が自分たちの興味・関心で選択した 10 のグループが自主的に計画・立案し、一人一人が将来の夢を育む取組です。課題解決能力・コミュニケーション能力など社会人として必要な能力の育成を目的とし、地域をフィールドに探究活動、発表を行うといった内容です。

2 点目が、学校設定教科「みまさか学」です。これは、2 年生と 3 年生の選択授業となり、地域人材の育成・社会に改革を起こせるリーダー人材の育成を目指しています。地域をフィールドにした探究活動や、様々なビジョンを持った人々との出会いを通じて、地域への理解を深め、課題解決能力を育成しています。ビジネスプランの立案や政策提言など、社会に役立つ実践を行っています。

本事業では、みまさか学受講生と公民館がタッグを組み、むかし倉敷ふれあい祭り実行委員会に参画し、事業を進めていきました。

＜取組内容＞

林野商店街エリアにある美作市美作歴史資料館（大正時代に建てられた歴史的建造物）付近でむかし倉敷ふれあい祭り当日にテントブースを設け、地域の歴史・伝統について語り合い、誰もが楽しめる”食”をテーマに、あらゆる世代と地域感交流を行うことを企画・運営しました。

○タイムスリップカフェ

- ・2 種の焼き菓子の販売（クッキーとマフィンバー販売）
- ・氷菓（アイスバー販売）

→大正 10 年（1921 年）に建てられた本格的なルネッサンス様式を取り入れている歴史的建造物をバックグラウンドビューとして使用することでタイムスリップしたことを想定し催しを行いました。日本に西洋文化が入ってきた時代を連想させる焼き菓子と大正時代に作られたとされているアイスクャンディーを販売しました。味に関しては、大正時代に生まれたラムネ味、岡山特産である桃を選び、時代感と地域感を味わっていただきたいという思いで実施しました。さらにテントブース付近に休息スペースを設け、地域住民と交流できる環境をつくりました。

美作市美作歴史資料館の説明や大正時代の出来事が記載されたチラシを作成し、配布しながら販売することで、地域住民との交流機会を生み出しました。

○料理教室

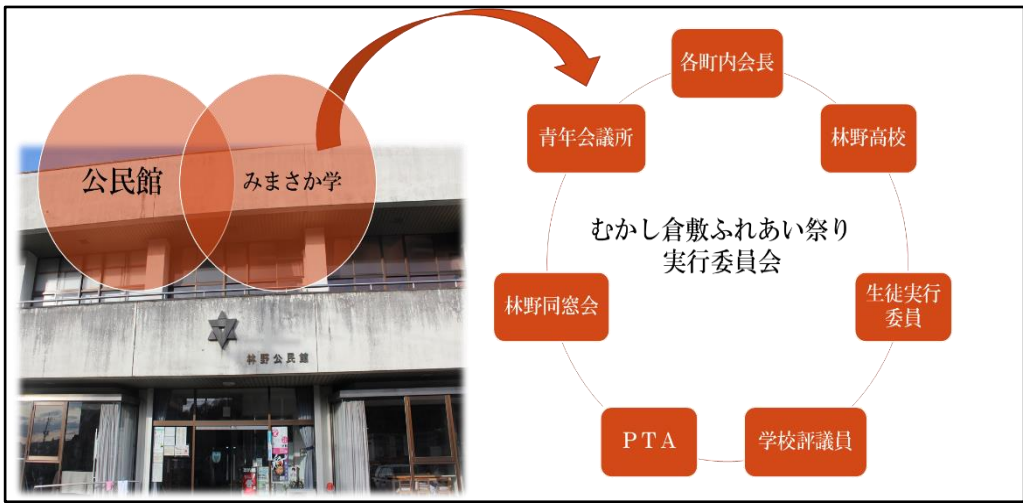
- ・餃子づくり

→子どもからお年寄りまで、幅広い世代間交流を目的に開催。一つの作業を一緒に行うことで、そこに会話が生まれ、地域との距離を縮めることができると考えました。

地域住民 5 名、小学生 4 名、高校生 3 名で開催されました。餃子のあんを高校生が事前に準備し、当日の料理教室の際には、あんを皮でつつむ作業を地域住民がお手本を示し、交流を深めました。このグループでは、“一人でも多くの地域の方に来てもらいたい”という強い思いから、高校生らが事前に地域住民宅を直接訪問し、イベント実施の経緯や思いを語り、協力を依頼しました。小学生は祭り当日に来場している子どもたちに声掛け、呼び込みました。司会・進行は高校生が実施し、世代間交流を実現させました。



祭り当日の様子（伝統ある代官踊りの披露）



むかし倉敷ふれあい祭り実行委員会 構成



タイムスリップカフェ 当日の様子



料理教室 当日の様子

○振り返り

むかし倉敷ふれあい祭りでの取組内容を振り返ってのプレゼンを高校生が地域住民と後輩生徒らを対象に実施しました。ファシリテーターとして「特定営利法人 タブラ ラサ 利根弥生氏」をお招きしアドバイス等いただきました。

事業に取り組んだ**高校生からは**、「企画段階から地域住民を巻き込んでイベントに取り組むことができれば、さらに地域と一体になった祭りを実施することができたのではないか。地域住民と意見交換をすることで地域が求めているものやニーズが発見でき、イベント内容や運営方法についてもプラスの影響を生むのではないか。」という意見がありました。

地域住民からは、「このように地域活性化のために取り組む高校生の姿は嬉しい限りである。この発表を聞いて、協力できることは協力したいと思う。今回、料理教室のグループが自宅に直接訪問という形で協力依頼、案内をしてくれたのはプラスに働いた。あれが、文書だけやチラシの投函だけであればこのように人は動かなかったように思う。直接人と触れることが大切であると感じた。」という意見がありました。



振り返り 当日の様子

<成果>

- ・企画、広報、運営まで高校生が主体となり、事業を実施することができた。
- ・料理教室では、これまでの経験等を踏まえ、広報方法を見直すことで地域住民との交流を生むことができた。
- ・この事業を通じて、林野高校（みまさか学）の取組を地域住民に知ってもらうことができた。
- ・公民館（行政）との連携により、地域住民への周知や交流の場を提供することができた

<課題>

- ・林野高校生の地域教育活動、活性化への取組がまだ地域の中に浸透していく取組になっていない。
- ・イベントに対する高校生の思いや目的が地域へまだ伝えきれていない。
- ・イベント内容等の企画は高校生のみで行っているため、地域の要望やニーズが汲まれていない。

<まとめ>

～学校・地域がさらなるつながりをみせるために公民館（行政）ができること～

□地域の方々も「生きがい・やりがい」を感じることができるよう

→声・思いを「つなげる（価値づける）」

高校側は地域住民とのつながりの中で、「高校生たちの自尊感情が高まってきていること」「地域の方とのふれあいでコミュニケーション能力（言語能力）が向上し、小論文等で成果がでてきているということ」など成果を感じていると話す一方、地域の方々は、自分たちができる範囲でがんばっているだけでという意識で、まさかこのように目に見える形で成果が表れているということは思ってもいません。

逆に、地域の方々からは「若者の声が聞けるだけで嬉しい。」という声もありました。この声・思いを両者に耳にすることで、さらに生きがい・やりがいを感じ、意欲的になるのではないかと思います。そこで、両者が集まっている場で第三者の立場から価値付けを行う必要があるように思います。

□目的・要望・課題の「すり合わせ」を行うために

→「場・機会を設けていくこと」ということです。

地域住民と高校生が互いに思いや考えを語り合う場を設け、そのイベントに対する振り返りや反省、次のイベントに対して意見交換や思いの共有を行うことが重要であるように感じました。また、新たにゼロから機会を生み出して、交流の場を創出するのではなく、町内会単位での祭りに高校生が訪れるなど、既存のイベントの活性化や普段の生活の中で交流機会が増えれば、学校と地域が自然とつながる関係が築いていけるように思います。